MieHerstory

News Letter No.22

三重の女性史研究会

三重の女性史研究会会報・第22号
2015年1月8日発行
編集：三重の女性史研究会事務局
〒514-1133 津市久居万町638-2 佐藤方
TEL＆FAX　059－255－7813
✉ mie-her09@jewel.ocn.ne.jp
発行：三重の女性史研究会
〔年3回発行／不定期〕

ご来場ありがとうございます

Thank You

地域「学」フェスティバル

（三重県総合文化センター）

2014年10月18日（土）

「土に生きる～三重の農業女性の夢を～」「三重の女性史研究会のあゆみ」「鈴山雅子前会長のあゆみ」を展示しました。

みえの男女２０１４

（三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」）

2014年11月8～9日（土・日）

「三重の女性史研究会のあゆみ」並びに「鈴山雅子前会長のあゆみ」パネルを展示しました。

Thank You!

三重の女性史研究会　アンコール展示

（フレンテみえ1階）

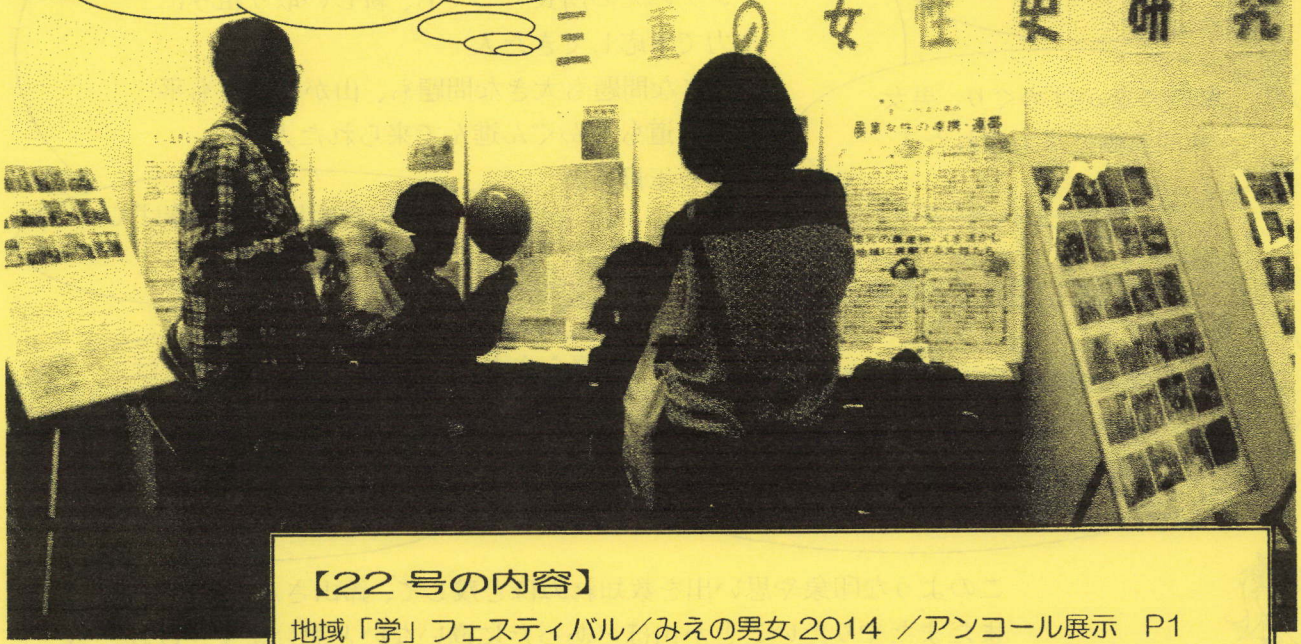
2014年12月27日（土）～2015年1月29日（木）

「鈴山雅子前会長のあゆみ」パネルを展示しました。

☞アンコール展示

（ただいま好評展示中）

初めての参加でしたが、親子連れの方々など新たな県民の皆様に、三重の女性史を知っていただくことができました。



☝地域「学」フェスティバル「三重の女性史研究会」ブースにて

【22号の内容】

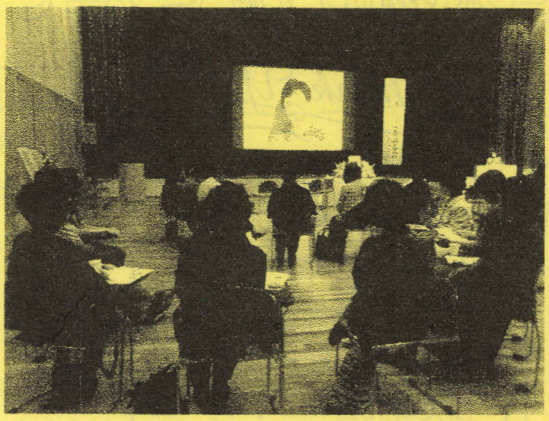
地域「学」フェスティバル／みえの男女2014 ／アンコール展示　P1
「鈴山雅子さんを語る会」報告　P2～3
新企画「聞き書き道場」とは　P3
聞き書き道場（第1回）「女性の自立を目ざした作家・竹内　令」　P4～7
エッセイ『三重の女性史』を読み返す（6）　P8

「鈴山雅子さんを語る会」より

２０１４年9月１１日（水）１１時～１６時　於フレンテみえ多目的ホール
７６名の参加あり

“鈴山さんありがとう”“鈴山さん安らかにお眠りください”との祈りをこめて、４２名の方々が、鈴山さんを偲んで語ってくれました。

“励まされ、勇気づけられ、目標を持たせてもらい、行動に移していけた”という、それぞれの方々の鈴山さんとの出会いと思い出が語られました。その一言一言から、“そんなことがあったなあ”“ほんとうにそうだった”と誰の心にも合点できる生前のお姿が浮かんできます。



語られた鈴山さん像

美しい人

花のある人

やわらかくふくよかな人

輝いて太陽のような人

人との出会いを大切にされた人

ブルドーザーというニックネームどおりの人
・教師・校長としても、県の職員としても、フレンテみえの所長としても、新しい取り組みに全力で対応してきた人
・小さな問題も大きな問題も、山があっても平たんな道もぐんぐん進んで来られた人
・肝っ玉母さん

県内外をかけめぐり、男女共同参画に尽力された人

女性のために生涯を捧げてこられた人

女性問題に関しての活動は、中でも目ざましい人
・婦人問題アドバイザー養成講座
・世界女性会議　・アイリスの翼
・男女共同参画事業　等々

怒らさなくてもよい人を怒らせてはいけないと言った人

偉大な大切な方

このような印象や思い出を数知れぬほど残して、鈴山さんは逝かれました。

まだまだやりたいことが山ほどあったに違いないと思います。けれども、四日市市での３月のとりくみ「防災とまちづくり」を成功させた後に「思い残すことはない」と仰っておられたとか。

語る会の様子や皆様からの追悼の思いは、来年６月刊行予定の追悼文集からたどっていただければと思います。

「鈴山雅子さんを語る会」を終えて

９月１１日、鈴山雅子さんを偲んで「語る会」をいたしました。６月８日に亡くなってから約３か月。まだまだ胸の内はともすると波立ち、涙が零れ落ちる頃です。仏教のしきたりからいえば、百か日あたり、時期としては妥当であったとは思いますが、こんなに悲しい事業は初めての経験でした。

「語る会」だけでなく追悼文集もと、鈴山雅子さん追悼事業実行委員会を早々に立ち上げたのは、三重の女性史研究会事務局の佐藤さん、男女共同参画みえネットの事務局永戸さん、亡くなる直前まで秘書として仕事をしていた土屋さんの３人による呼びかけからでした。恐らく、いてもたってもいられない気持ち、何かしなくてはじっとしていられない気持ちからであったと思われます。

私などは茫然として未だに亡くなった事実を信じられない、信じたくなくて何も手がつかない有様でした。

偲ぶ会ではなく、語る会に、「鈴山さんの目指しておられた男女共同参画社会への運動を絶やすことなく継続するために我々が決意する日にしよう」その思いは参加者の皆様にも伝わり、とても意義のある会となりました。

さすがに鈴山さんと交流のあった方々、お一人おひとりのお話しは、改めて鈴山さんのお人柄の大きさ、優しさその業績の重要さを知るものでした。

この会を行ってよかった、そして、次なる事業追悼文集の編纂に心を込めたいと思います。

鈴山雅子さん追悼事業実行委員会　　伊藤英子

次ページから新企画「聞き書き道場」が始まります

三重の女性史研究会では昨年度、濱田滋子名誉会長・鈴山雅子前会長の二大巨星を失いました。濱田さんに関しては『三重の女性史』で聞き書きを行い掲載することができましたが、鈴山さんに関しては、多忙を極め、聞き書きはおろか会報に原稿を書いていただく時間さえありませんでした。

この反省を踏まえ、私達は今回から「聞き書き道場」をスタートさせます。会員が２～３人でチームを作り、互いに聞き書きをした結果をまとめます。顧問の伊藤康子先生に講評をしていただき、順次会報に掲載していきます。三重の女性史に関わる前からそれぞれに、女性の悩みや痛みを感じ、男女共同参画に関わってきた会員達の道のりをお届けするとともに、聞き書きの確かな力を高め合っていきたいと思います。

聞き書き道場　Ｎｏ．１
竹内　令　さん　より

聞き取り（２０１４年７月／１１月）及び著書より
聞き手：寺井和子・江南登美。文責：江南登美。

女性の自立を目ざした作家・竹内　令

1932（昭7）年、津市内の真宗高田派寺院に、8人きょうだいの5番目次女として生まれる。22歳から43歳まで小学校教師、43歳からは、自由な立場で作家活動を続けた。

考え方、生き方に影響を与えた家族

“令”という名前は父の思いのこもったもの。“美人に、そして賢い人に”という親としての願いからの命名だったとか。しかし、父が幼い令を唯一褒めてくれたのは、“作文が上手い”ということだった。そのことがよほど嬉しかったのか、作文が大好きに、本を読むのも好きになる。後に、文章表現に向かう自信と力を与えてくれたのだった。

一方、母は、15歳で“坊守”として嫁いでから、8人もの子供を産み育てた。父は、体が弱かったが、自分にも家族にも厳しく、“物は持たぬが幸せ”と考える人だったので、坊守の母の苦労は並大抵ではなかった。子供の進路についても父は、自らの意思を強く押し出し、本人達の意向や母の悲しみを知りながら、国策に従うことを望んだ。折りしも、戦争激化の中、出征した長男・次男は終戦目前に戦死、更に三男は、終戦の年の3月に、15歳で、満蒙開拓青少年義勇軍として渡満。終戦の翌年秋に引き揚げてくるまで、消息不明だった。この終戦前後の不安と悲嘆は、母にとって筆舌に尽くし難いものだったに違いない。

そんな母を見て、“自分は母のような自分を押し殺した生き方はしない”と、令は強く思うようになっていく。

終戦の年（1945年）、令は高等小学校高等科1年になっていた。女学校に行くだけの余裕のない家計だったのだ。1947（昭22）年4月、高等科2年を卒えた令は、三重師範女子部に入学。既にこの時、自活の道として教職を考えていた。これには、父も同意してくれた。戦後日本の急転換の中で、娘の将来を考えてくれてのことだったようだ。そして、1951（昭26）年3月、予科を卒業し、大学受験ということになる。やはり気になったのが授業料のことだった。しかし、“俺がなんとかするから”と背中を押してくれたのが、三男の兄だった。戦時中に父から勉学の道を断念させられ、満洲へ送りこまれ、終戦後、逃避行の末、1946（昭21）年秋に、命からがら帰国していた兄だ。令の受験の頃には病床にあった父の後継者として住職になっていた兄が、父からかねがね“令を進学させてやってほしい”と頼まれていたことも後々に知る。

父からの“将来を考えての強っての願い”、母の“娘には経済力をつけさせたい”との思い、兄の“勉強はやりたいだけやりたかった”という苦い思いから妹には存分に。この三人の思いを全て受けて、三重大学三期生となる。音楽専攻だった。その後、1952（昭27）年秋、令の大学2年の時、父は死去し、名実共に兄が保護者になる。

自活第一章　教師として

1955（昭30）年3月、三重大卒業。4月より安芸郡安西小学校教諭として教師の道、自立への道を踏み出す。

小学校では全教科を受け持った。担任の子供達へは、本が好きになってほしいと願って、給食時の読み聞かせをした。また、自分の思いが自在に表現できる力をつけたいと、作文指導には特に力を入れた。これは安西小学校を振り出しに、津市敬和小学校を退職するまでの21年間続けた。そして学生時代から入っていた津市内の混声合唱団での活動も続けていた。

この教師生活の期間での最も大きな収穫は、結婚し、子ども二人に恵まれ、義母による子育て支援も受けながら働けたことである。そこで、“職を持つということは、男に頼って生きるという考えを持たなくてもすむ”と実感したのだ。

教職21年目に入った1975（昭50）年、43歳の時、義母が病いに倒れた。令にとって、仕事への理解者であり子育て支援者でもある義母の発病は大事件だった。夫と何度も激論を交わした末、“妻が退職する方が万事うまくいく”という結論に達する。この顛末を隣室で聞いていたらしい子供達には、成人してから実を結んできた“男女共同参画”への意識が植えつけられたのではと、後々感じたものだ。年度末には退職しよう。そして義母の看病も家事もしよう。そう考えて、学校での指導と家庭のこと等、それまで以上に頑張っていたのも束の間、義母は退職の日を待たずに他界してしまう。だが、学校に申告していた通り、年度末で退職した。

自活第二章　作家としての出発まで

退職後の令は、子どもが帰宅するまでの自由時間を思う存分に使った。ここで、21年間の教職期間の経験や身軽な動き方が物を言うことになる。

二男の新町小学校ＰＴＡのコーラスの指導者を頼まれ、ＰＴＡの読書クラブに誘われ、ＰＴＡの会計、副会長と、次々に舞い込んでくる役割をひきうけていく。

更に、ボランティアグループにも加わり、入浴介助や傾聴のボランティア活動をした。また、公民館の女性合唱教室の講師も依頼されるなど、多忙な日々になった。

特に、ＰＴＡ読書クラブでは、読書感想文を書いて読み合っていたが、その時の仲間が、ＰＴＡ卒業後、創作に目ざめ、“あしたば会”を結成し、同人誌『あしたば』を創刊することになる。（1983《昭58》年8月）これが創作への道を拓くことになる。

創刊までの2～3年は、文章づくりの基本を芸文協から講師を招いて研修し、文章力を高める努力を続けた。“あしたば会”は女性ばかりの同人誌だった。

その頃書いた初めての小説が『ほおずき』である（発表1983年『あしたば』創刊号）。“息子二人が戦死したにもかかわらず、まだ在りし日の姿のまま自分の傍らに居る錯覚に陥っていく母の姿”を描いたものだった。これを発表した年・1983（昭58）年10月、母は80歳で死去する。翌年、母の一周忌に、兄の発案で、追悼文として出版することになる。それには『ほおずき』に加えて、母の最期を描いた『鐘楼のある風景』を書き、二作品をまとめて『鐘楼のある風景』として一冊にして1984（昭59）年10月、兄の手によって発行された。その兄も、それから1年も経ずして母の後を追って旅立った。（53歳）

自活第三章　女性問題への取り組みと作家活動

兄の死後から、生前に聞かせてもらえなかった満洲での2年間が気になり始める。長兄次兄のことも知りたいと念じて、取材に精力的に取り組みながら、『兄たちの青春』として『あしたば』に連載を始め、1986（昭61）年から1989（平成元）年まで掲載する。単行本となったのは、1994（平6）年のことだった。そして更に、三兄より前に満洲に出て、そこから出征し戦死した次兄の足跡をたどるため、訪中団の一員として中国へ赴いた時の紀行文を加えて2006（平18）年『贄舞』として再版した。テーマは、“青春まっ只中の将来ある若者たちを国策に従わせ、有無を言わせず戦場に狩り出し、むざむざ命を落とさせたことへの告発”である。“哀しい生贄の姿を、少なくとも身近な人に今一度伝えなければならないのでは”と、この本のあとがきに令は記した。体験者の具体的な証言をもとにこれからの日本のあり方を問う重い課題にとりくんだ作品だった。令の作家としての第一の柱である。

もう一つ、小説で描きたいのは、女性の自立の問題だった。

始まりは、1988（昭63）年の総理府募集の“婦人問題に関する意見文”への応募だった。偶々講演会パンフレットの欄外に書かれていたもので知り、“自分自身の自立への道と男女共同参画型社会実現のためには、女性自身が気づかなければいけない”ということを『不美人からの出発』と題して書いたのだ。入選後、県から、取り組みの案内や研修への参加要請が多数届くようになる。

例えば、「婦人問題アドバイザー養成講座」、「婦人国内交流研修」、「三重県第1回アイリスの翼」、「北京・世界女性会議」等々。「婦人、女性」と冠にくる催しや企画への呼びかけの殆ど全てに参加してきた。そこで女性の生き方や歴史について考えを深めていく。そして、女性の自立や、男女共同参画への男女間の意識のずれ等をテーマにした小説を書き『あしたば』に掲載していく。

ある会合で、令は、“私は作品のあちこちに、隠し味のように男女共同参画の考え方を投げ入れてきた”と語ったことがある。

2010（平22）年刊行の『組曲家物語』でも、主人公に語らせている。

「ゆずりは」では、“自分がやりたい道を選ぶべきよ。絶対!!”“それが当たり前の世の中が、もう目の前に来ているじゃないの。挑戦するべきだわ!!”と。

「花筏」では、“自分で考え、自分で決断して、自分で動く。そんな人生をとりもどしたかった”と。

作家として、読者に訴えたい二つのテーマが、“反戦”と“女性の自立”であったが、令は、評伝や評論、エッセイも執筆してきた。中でも、評伝『近代的国語辞典の祖、谷川士清』は、谷川士清という名と功績が中学校の教科書に記載されるに至る。津市輩出の偉大な国語学者の研究だった。

40年の歳月を経て

43歳で教職を辞してからの40年間、次々に周りの人からの応援を受けて活動を広げていった令は、その全てに全力を注いできた。“その褒美かどうか気恥ずかしい”が様々な表彰も受けている。

最初の1986（昭61）年の県文学新人賞受賞は励みになったし、福祉活動、ボランティア

活動への賞も受ける。2008（平20）年には『谷川士清』評伝で清水信文学賞を、2010（平22）年には県男女共同参画功労賞も受けた。

最近の活動として達成感が強いのが、『三重の女性史』編纂への参画だった。2005（平17）年から“フレンテみえ”で企画され、2009（平21）年に刊行されたのだ。多くの協力者の結集によって編まれた中身の濃い三重県全体を見通した女性史である。現在は“女性史研究会”として、仲間と共に勉強会を続け、更に続編への意欲を盛り立てようとしている。今後は若い世代に期待しているが、可能な限り役に立ちたいと、82歳の現在も活動に参加している。

第一弾　竹内　令さんの聞き取りを終えて

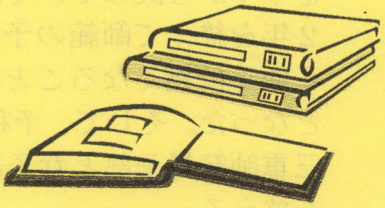
82歳までの前半43歳までと後半43歳から、その二部構成の半生に貫いている思想と実行力に感動しました。

取材者として大切なのは、充分な準備でした。しっかり“事前準備”をし、“取材の核”を外さないでしっかり聞く。そして“まとめる力”。こういう三つの柱が必要だったと反省ばかりでしたが。

これからの聞き取りに此の反省を生かして頂くと幸いです。

江南　登美

【顧問：伊藤康子先生からの講評】



聞き書き道場№1　竹内令さん

2014.12.4　伊藤康子

「家族」と「自活」の2部に大きく分け、後半を3つに分け、最後に社会の評価、自身の未来への見通しという総括を置いて、良くまとまっています。何より全体像を把握しやすく、人物への関心が深まるという意味で、この聞き書きは成功しています。事前準備をしっかり行っていたことがうかがえます。

その上で申し上げるとすれば、読み手は、竹内さんは才能に恵まれ、家族に恵まれ、教師をしていたから社会的にも信頼され、だからできた、自分には無理無理、と思う可能性があるのをどう考えるかです。恵まれていたとしても、チャンスをしっかりつかみ、チャンスを自分から作り出していった竹内さんの一面をもっと深く描いてください。また子どもたちに読み聞かせ、作文指導をしたとき、子どもたちから竹内さんが育てられたことは何だったでしょうか。「あしたば会」の会員から目を開かれたことは何だったでしょうか。「谷川士清」という郷土の先人の評伝を書いた郷土へのこだわりは何なのでしょうか。竹内さんを書くことで、竹内さんを取り巻く社会が浮かび上がるように、竹内さんが三重という社会に制約され、或は三重を跳躍台として、自活でき、作家になれたとわかりたいのです。そうすれば、三重の若い人たちが自分らしい人生を選び取れるモデルとして、もっと竹内さんから学べるでしょう。

でも私が竹内さんを良く知らないからこういうことが言えるのかなあ、と思ってもいるのですが。

エッセイ

『三重の女性史』を読み返す（６）

「男女共学・同学」が女性たちの道を分けた時代があった

竹内　令

第三部「民主主義の発展を支えて」の中の第二節・五「男女共学・同学の徹底」（P97）を読むと、小学時代の友人の顔が幾つも浮かび上がる。1932（S7）年生まれの私たちは、困難な時代を潜り抜けて来たけれど、現在を拓く生みの苦しみの時代でもあったのだと、あらためて実感するのだ。

＜本文＞

1947（昭和二十二）年六・三・三・四制、男女共学・男女同学を基本とする新学制が実施された。新制中学は施設も教員も行き届かず「ないないづくし」の発足であった。軍政部は民主的日本の建設、封建制打破のため義務教育重視、高校も男女共学、総合制、学区制を徹底するよう要求、改革を迫り、実行された。……

この 1947 年、私は、三重師範学校女子部予科１年（現・中３）に入学。小学校同学年の女子数名は、県立女学校、市立女学校、実践女学校の３年生だった。

８人きょうだい、清貧の中で育った私は、学費が不要な師範へ進学することを早くから決めていて、小学校を卒業すると併設の高等科に進み（この夏終戦）、２年を終えて師範の予科に進む。この年に新制度が発足して、師範も予科もゆくゆくは無くなることになり、私の学年は下級生が入ってこない最後の予科生となった。そして、予科２年（現・高１）だったか３年だったか定かでないが、三重師範男子部と女子部は男女共学で合併。私はこうして予科４年（現・高３）を終える。

証書を見ると「三重大学・三重師範学校予科修了（S26 年３月１日）」と、実にへんてこりん。三重大学の沿革史を探して「どこにも俺等（予科）の痕跡が無い」と言って嘆いた友人も居た。

私の場合は長兄、次兄が戦死したが、幸い三兄が外地から戻ってきて、何とか新制大学を受験することができ、「男女共学・男女同学」の恩恵を受けることになるのだが。

ところで前述の、小学校同級生の女性たちはどうだったか。

彼女たちは、女学校３年を終えた時点で二つに分かれた。「男女共学など、とんでもない」と退学（中学卒業）させられた人が何人も居たのである。予定より２年も多く月謝を払うことが困難な家もあったろうし、言葉通り、男女共学にたまげた親もいたことだろう。３年間月謝を払って遠くまで通いながら、勉学を諦め、女学校卒にならず、悔しい思いをした同級生たちが居たのである。

【編集後記】この年末年始は、男女みえネットの仲間とともに追悼文集の編集作業に追われました。お忙しい中、原稿を執筆していただいた方々、大変有難うございました。一周忌でもある今年のフレンテまつり（6月6･7日）には刊行できるよう、力を合わせて作業を進めていきたいと思います。